

氏 名	蜂 谷 俊 隆
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（人間福祉）
学 位 記 番 号	甲人第13号（文部科学省への報告番号甲第448号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年12月5日
学 位 論 文 題 目	<b>糸賀一雄の研究</b> <b>―戦後知的障害児者福祉の展開と糸賀の業績・思想をめぐって―</b>
論 文 審 査 委 員	（主査）教 授 室 田 保 夫 （副査）教 授 杉 野 昭 博 教 授 今 井 小 の 実 加 藤 博 史（龍谷大学短期大学部教授）

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の表題にある糸賀一雄（1914－1968）は周知のとおり戦後日本における障害児者福祉におけるパイオニアであり、指導者でもある。この糸賀についての実像、彼の業績と思想を考察し、その全体像にアプローチしたのが本論文である。そこには、これまで糸賀という人物について、社会福祉史からも十分に検討されてこなかったことへの反省的視点が存している。糸賀は1968年に亡くなるが、その後においても彼の主張した思想や提起した課題は、日本の社会福祉に大きなインパクトを与えた。しかしそれが正確に評価されているのか、という問題がある。また、その実践をとおして将来、何を構想していたのか、といった課題に応えるためにも、糸賀の生涯の実像を正確に把握しておく必要があることはいうまでもない。こうした課題に向けて蜂谷氏は時期区分を設定し、10章構成でもって論を展開している。以下、章ごとにその要旨をまとめておく。

序章「糸賀一雄を研究するにあたって」では、蜂谷氏の糸賀研究への問題意識と課題が述べられている。そして近代日本における知的障害児者の歴史を辿り、糸賀研究の背景を確認している。さらに詳細な先行研究がレビューされ、糸賀の業績と思想についての従来の評価について詳論している。最後に糸賀の生涯の時期区分を設定しながら、分析視点は何かを明確に述べ、問題の所在と分析方法と視点、この研究への課題が提起されている。糸賀が近江学園の設立に参画していった動機や思想の全体像、その変遷についてはこれまで十分に解明されているとは言えず、とりわけ社会福祉分野からのアプローチについては、検討すべき多くの課題を残している、としている。

第1章「出生から宗教哲学の専攻まで」では、糸賀が鳥取市で出生し、旧制松江高等学校在学中にキリスト教の洗礼を受け、京都帝国大学に入学し、宗教哲学を専攻する。この時期、糸賀が如何にしてキリスト教と出会い、どのような動機で入信していったか、親友であり、糸賀を受洗に導いた畏友圓山文雄という人物、そして京大時代に師事した波多野精一らとの関係を中心にして、糸賀の思想的原点を検討している。

第2章「代用教員の経験と滋賀県庁での行政官としての働き」では、京大卒業後、代用教員となり生涯の盟友となる池田太郎や教育哲学者の木村素衛と親交を深めていく過程と、滋賀県庁において近藤壤太郎知事に実務能力を厳しく鍛えられ、学生義勇同志会の支援を通して十河信二との出会いもあり、政財界にも人脈を拡大していく過程を追求している。

第3章「下村湖人と出会い『煙仲間』運動」では、この時期の糸賀が下村湖人と親交をもっていたことに着目し、下村の書簡や糸賀の著作等を通してその実態に迫っている。そして、糸賀が下村の思想や彼の提唱するところの「煙仲間」運動にも共鳴しており、後の思想形成にも重要な影響を与えていることを明らかにしている。

第4章「近江学園前史としての三津浜学園と『塾教育』の思想」では、彼の社会福祉の実践の場、三津浜学園は、近江学園の前身の一つとされてきたが、従来の研究ではその実態については全く解明されていなかった。そのため、新たに史料を渉猟し、その設立過程と運営実態について明らかにしている。そして「煙仲間」運動との関連について検討している。

第5章「近江学園の設立と戦後の『煙仲間』運動」では、1946（昭和21）年、糸賀は近江学園の創設に参画し、園長として運営を担っていくことになる。近江学園へ参画した動機については、行政官として戦争遂行にあたったことに対する責任感や木村素衛からの感化が指摘されてきたが、それに加えて下村湖人や「煙仲間」運動から受けた影響もあり、近江学園の運営についても「煙仲間」運動の影響は随所に見られる、と論じている。

第6章「昭和20年代における糸賀一雄のコロニー構想と知的障害観」では、昭和20年代半ばから後半にかけて、「糸賀が社会との橋渡し」を担う「コロニー」を構想していくことについて論述する。近江学園は、徐々に知的障害児の比率が高まり、当初の理念や運営方針は変更を迫られる。当然ながら、背景にある理念や思想の練り直しも必要となり、知的障害観にも変化が見られ、糸賀が戦前の知的障害観や慈善的な施設のあり方を、如何にして克服していくのかというその過程を追求する。そして、それらをふまえて糸賀の施設展開とコロニー論の意味を捉えなおすことを試みている。

第7章「精神薄弱児育成会の結成と優生思想—1952～1960年頃を中心に—」では、この時期の糸賀は、障害者に対する社会的な理解や社会保障を求めた運動に関与し始めており、特にこの時期の運動を主導していた「精神薄弱児育成会」との関係に焦点をあてている。そして、「精神薄弱児育成会」の設立への糸賀の関与を明らかにし、糸賀の主張と育成会に参集した関係者の間には優生思想の考え方等、乖離があったこと、それにも関わらず糸賀が運動に関わり続けていたことの意味について考察している。

第8章「『福祉の思想』の形成段階としての昭和30年代前半の思想展開—『エロスとアガペ』論、『内的適応』論、『生産教育』をめぐる—」では、昭和30年代前半の思想展開について、この時期の糸賀が用いた「エロスとアガペ」論、「内的適応」論、「生産教育」という三つの概念を追求している。この過程で「処遇理念」は社会効用論から、当事者の生き甲斐を重視する内容への変化が見られ、さらに社会変革の主体として障害者自身が位置づけられる様になっていく。

第9章「ヨーロッパ視察旅行」では、1960年11月末から翌年2月11日にかけての欧州諸国の視察旅行に焦点をあて、糸賀が先進国の福祉の状況にただ感銘を受けただけでなく、視察報告を通して自らの実践や今後の日本の進むべき方向について考察している。これらは最晩年の糸賀の思想や活動を捉えていく上での分析でもある。

第10章「地域福祉論の特質—重度重複障害者・重症心身障害児対策に向けたソーシャルアクションとの関係に着目して—」では、1960年前後から1968（昭和43）年に逝去するまでの時期には、重症心身障害児を対象とした取り組みと地域福祉論の展開がほぼ同時に本格化する。糸賀の地域福祉論は、施設機能を地域に開放する活動からだけ展開されたのではなく、最重度の障害者に対する支援のあり方をトータルに検討し、構築しようとする中から展開されているところに特質がある。それは、入所施設や大規模複合施設を意味する「コロニー」のあり方をめぐる議論や、その危惧としても発せられたものであった。このことは、後の日本における障害者福祉において「重度の障害者は収容施設へ」という発想が大勢を占めていく状況から考えれば注目すべきことである。

「終章」の「結びにかえて」では、これまで論じてきた10章についてはもう一度、糸賀の生涯における足跡と思想を整理しながら、この研究の意味について再確認している。最後に糸賀の言葉「福祉の実現は、その根底に、福祉の思想をもっている。実現の過程でその思想は吟味される。どうしてこのような考え方ではいけないのかという点を反省させる。福祉の思想は行動的な実践の中で、常に吟味され、育つのである」という糸賀の言葉を引用し、糸賀の生涯を問う課題として挙げている。

そして論文の末には「参考文献一覧」があり、詳細な糸賀の著作文献や糸賀研究への文献が挙げられている。以上が本論文の要旨である。

## 論文審査結果の要旨

戦後、日本における知的障害児者福祉のパイオニアとして、評価の高い糸賀一雄については、数冊の評伝や多くの研究論文があるが、糸賀の全体像へアプローチしている研究業績は意外と少ない。こうした研究状況において、蜂谷氏は果敢に糸賀の実像把握を追求していった。多くの史料を丹念に当たりながら、実証的な研究方法でもって、糸賀の全体像を把握したことに成功している。

第1として、糸賀の初期研究、下村胡人や煙仲間運動、あるいは晩年のヨーロッパ視察旅行など、従来、糸賀研究において空白若しくは言及が少なかった点、あるいは不明であった点への考察をとおして、糸賀の全体的な業績を詳細に論証したことは、きわめて重要であるといえる。この蜂谷氏の研究によって、かかる点が明確になったことは糸賀の人物把握において、高く評価できるものである。

第2として、「発達保障論」をめぐる論争や「この子らを世の光に」といったような、糸賀の代名詞的な言葉についても、彼の生涯から実証的にそれを描き出して見せている点において評価できる。さらにこれは蜂谷氏自身がいつているように、彼の人生と苦難、実践に営まれた中から生み出されたものであることを論証している。彼の死後、様々な用語の使い方がなされてきたが、それを糸賀の原点に立ち返りながら論述していこうとする点は高く評価できる。我々も常にこの原点に立ち戻っていかなければならないことを示唆している。

第3として、糸賀の思想について彼の青年時代からのキリスト教受容、そして大学における哲学や宗教への関心の核心に言及し、糸賀の思想に影響を与えた人物関係を彼等のもつ思想との関連性を追求している。たとえば青年期からの圓山文雄、木村素衛、永杉喜輔、下村胡人、近藤壤太郎、同僚の池田太郎、田村一二、岡崎英彦といった人物が登場し、彼の実践や人生観において多大な影響を及ぼしていく。そうした人間関係を人間曼荼羅の如くに登場させ、生涯とその思想を展開している点は説得力がある。

第4として、上記の人物像や思想性が時代とともに歩んでいくこと、つまり糸賀を時代の俎上に乗せながら描こうとしている点、歴史論文としての性格から当然ではあるが、そこには可能な限り、その時代の史料に当たりながら論証していこうという研究姿勢に窺える。それはとりも直さず、糸賀も時代の子であるということであるが、その時代を懸命に苦悩し実践し生き抜いた人物像が浮上しているのである。そこにある普遍的なものを見出そうとするのである。

第5として、序章において詳細な糸賀研究に関するレビューがあり、独自に時代区分をしながら各章を展開している。そして本論文の根幹とする章となっているものの多くは、学会誌に掲載されたものであり、学問的水準の高さはそれでもって担保されているといえる。全体として引き締まった文体となっており、学術的水準の高さが窺え、末尾に掲載している詳細な参考文献目録とともに、本論文は糸賀研究のみならず、今後の障害児者福祉研究において、大きな貢献となっている。

以下、蜂谷氏の今後の研究への期待をも込めて、課題についても指摘しておきたい。

第1に、糸賀における戦前と戦後の問題である。これは糸賀の戦時での国家思想や平和思想とも関連する

が、それを戦後の彼の実践と関連させながら研究を深めていってもらいたい。

第2に、思想研究の深化が必要である。たとえば糸賀はしばしば「限界状況」という言葉を使用するが、これはヤスパースの言葉であろう。糸賀と実存主義との関係、また木村素衛のフィヒテ研究とペスタロッツとの関係もあり、こうした周辺から受けた人物の内在的な思想と糸賀の思想との関連性を追求していくと、さらに糸賀の思想の核心が浮かび上がるであろう。

第3に、本論文を執筆するにおいて、現在、渉猟出来えた史料を駆使してのものではあるが、まだ未公開を含めて糸賀関係の史料が存在する。たとえば業務日誌を丹念に読みながら、彼の実践と思想への根拠を読んでいく作業である。今後の課題としていただきたい。

最後に本論文において、糸賀の全体像を実証的に描くという所期の目的は達成されているが、この研究が糸賀の思想を含め、現在にとっていかなる意味を有しているか、それへの継続的な課題追求とともに、研究の深化を期待するものである。

以上、本論文は糸賀一雄という人物について、その業績と思想にアプローチし、糸賀の全体像を追求したものであり、問題の所在と先行研究の詳細なレビュー、渉猟した史料を駆使し実証的に糸賀という人物を位置づけている。こうした意味において、この研究は従来糸賀一雄研究を飛躍的に高め、糸賀一雄研究のみならず、戦後の障害児者福祉史研究において優れた論文となっており、博士（人間福祉）の学位に相当する論文であると判断し、ここに報告するものである。